Series 16
オーディオ
つれづれの記

1960-70年代ニューヨーク 音楽シーンとバーンスタイン

AAFC 顧問　高橋敏郎

筆者は一商社員として1960年代半ば以降、途中3年程の一時帰国を挟んで70年代末まで通算10数年間を米ニューヨーク（以下　NYと略称）に駐在、偶々オーディオ機器を中心に弱電製品の対米輸出に携っていたことがあり、仕事柄　米国の音楽・オーディオ事情には　かなり興味を持って接することができた。

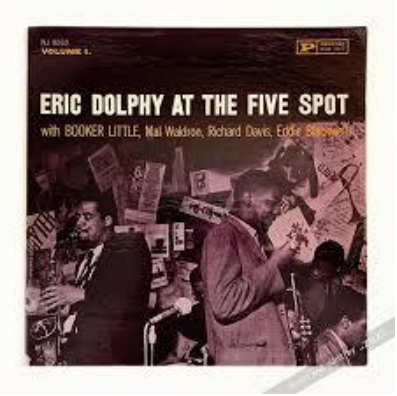
以下　当時のNY音楽シーンについて　特に後半部ではその頃NYでは無くてはならない中心的存在だった天才音楽家レナード・バーンスタイン（以下　愛称レニー）にも触れながら当時を回想してみたい。

敢えて独断と言われるかもしれないが、こと音楽一般に限っていえば、当時世界でNYほど活況に満ちた魅力ある音楽都市はなかったのではあるまいか。その後を含め　何回か訪れる機会があったロンドン、パリ、ベルリン、ウィーン、ミラノ、モスクワ、そして我が東京などと比較しても、音楽の多様性、質的レベルの高さ、スケールの大きさなどにおいて　決して引けを取るものではなかったし、何よりその圧倒的パワーを支えたのは多方面からの多額な企業献金や個人寄付を中心とする豊かな財政力と観客層や音楽ジャーナリズムの知的文化レベルの高さによるものではなかったろうか。但し　ことクラシック分野においては　特にバーンスタインが現れる20世紀半ばころ迄は　欧州と比べて幾多の後進性が指摘されていたのもまた事実であったが・・・。 そこで　先ずクラシック音楽から。

そうは言っても　”メット”と愛称されたオペラの殿堂、メトロポリタン歌劇場（創建の1883年以来　市中心部の39丁目にあった旧メットは1966年新メットとしてリンカーン・センターに新増築移転),100年以上”コンサート不動のメッカ”として君臨した57丁目のカーネギーホール、1842年創設の米國最古のオーケストラ、ニューヨーク・フィル（NYPと略）、今や世界最難関のクラシック音楽の登竜門とされるジュリアード音楽院(1905年創設）、更にクラシック・バレエではNYを代表する2大バレエ団、アメリカン・バレエ・シアター(ABT)とニューヨーク・シティ・バレエ(NYCB)等々、何れも20世紀を通して世界のトップ・クラスであり続けた存在と言ってもよかろう。

更に1959年以降、以前はスラムだったNY市街地北西部の広大な一画に　新たに開発設計された”リンカーン・センター”には　上記メット以外にも　８つのホール、劇場、図書館、音楽院などが新設、NYP, ジュリアード、ABTとNYCBなどの拠点が夫々次々にこの区域に移されて、今やクラシック音楽を含む総合舞台芸術では　米国、否　世界を代表する一大芸術殿堂の中心と化している。

クラシック以外に目を転ずれば　次は生粋米国生れのジャズということになろうか。19世紀終り、南部ニューオリンズの地で生まれたジャズは、1917年、第1次大戦開戦による紅灯街の閉鎖を機に北西部シカゴ、カンザスなどに移動後、禁酒法も廃止される30年代に入ると、スイング・ジャズに代表されるビッグ・バンドからスモール・コンボ形式のビバップ、モダンジャズ、フリージャズなど　ほとんど全てのジャンルのジャズは　ここNYで発展し継承されていくことになる。ビッグバンド時代の中心は、やはりハーレムであり、"コットン・クラブ"、"サヴォイ・ボールルーム"、"アポロ・シアター"などの劇場型が中心だったが、やがて30年代後半に入ると　ミッドタウンやダウンタウンを中心にいわゆるライブハウス形式が流行し中心になる。以下　好みを含めて、幾つかのライブスポットを紹介してみたい。



グリニッジ・ヴィレッジを中心とするダウンタウンエリアでは　"ファイヴ・スポット"、"ヴィレッジ・ヴァンガード"、"ヴィレッジ・ゲイト"、"ハーフノート"、"スラッグス・サルーン"、ミッドタウンには　"ブルーノート"、"バードランド"、"コンドン'ズ"、アップタウンには、未だ当時は　40年代　チャーリー・クリスチャンらによるビバップ発祥の聖地として知られる"ミントン・プレイハウス"なども存在していた。筆者が中でも　とりわけ好んで通ったクラブは、"ファイヴ・スポット"で、オーナーは、ジョー・ターミニ。中々革新的な男で当時はセロニアス・モンクやチャーリー・ミンガスらが毎夜の如く出演していたし、モンクのスポンサー、ニカ男爵夫人もよく聴きに来ていた。やがてジョン・コルトレーンや　フリージャズの先駆者オーネット・コールマン、エリック・ドルフィー、ブッカー・リトルなども度々来演するようになる。途中、店替えをしたりしたが　67年に閉鎖。残念だった。

極くポピュラーな分野では、豪華なラインダンスで有名な"ラジオ・シティ・ミュージック・ホール"　(RCMH)、や　"サッチモ"　ルイ・アームストロング、エリントン、シナトラら（彼らレジェンドも当時は現役だった！）によって数万の会場を埋め尽くす巨大な娯楽の殿殿、"マディスン・スクエア・ガーデン"(MSG)などがあった。

ところで、何故ニューオリンズ生まれのジャズが、最終的にNYに定着し　ここで開花したのだろうか。ある評論家によれば　理由は簡単で　当時からビッグ２と呼ばれたレコード会社、RCAビクターとCBSコロムビアを初め、米デッカ、サヴォイ、ブルーノート、ヴァーヴ、プレスティージなど多くのレコード会社が犇めき合い　NYに本社又は録音拠点を置いていたことだと断言される。そういえば　例えば録音自体は異なるが　ジャズ・レコードの世界発売第１号と第２号として著名なODJB（オリジナル・ディキシー・ジャズ・バンド）による演奏は何と　何れもRCAとCBSによって録音・発売されたものである。

更に　もう一つ理由を挙げれば、NYを含め　この周辺には　レコード再生を万全に引き受けることが可能な一流どころのオーディオ・メーカーが多数集まっていた事実も否定できない。一例を挙げれば、アンプでは　サウル・マランツ創業による"マランツ"、フランク・マッキントッシュによる"マッキントッシュ"、エイヴリー・フィッシャーによるフィッシャー・ラジオ（量販では常に米国ではトップだった）、キット分野の"ダイナ・キット"、スピーカーでは、大型はポール・クリプシュの"クリプシュ・ホーン"、ルディ・ボザークの"コンサート・グランド"、当時は新しかった小型密閉型では　エドガー・ヴィルチュアの　"アクースティック・リサーチ（AR),"　ヘンリー・クロスの"KLH"などなど。（ほとんどが故人となられたが筆者は幸いにもNY駐在中に大半の方とは　お会いする機会を得た）

然し、何と言っても、否定できない事実は　NYの直ぐ西近くハドソン川対岸にあったエディソン・ラボにおい

て　誰あろう発明王トーマス・エディソンによって1877年、世界で最初の本格的蓄音機が発明されたという厳然たる歴史的経緯とも決して無関係ではなさそうだ。

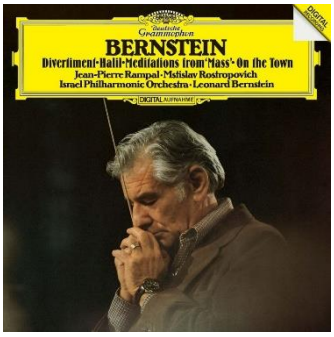
ハリウッドの映画産業と共に発展した西部カリフォルニアのオーディオ製品（ウエストコースト・サウンドなどと言われた）、例えば　"アルテック・ランジング"、"ジェイムズ・B・ランジング（JBL）" "アンペックス"などと音質傾向の違いを比較してみるのも一興であろう。

次は　これもNYのもう一つの魅力、ブロードウェイ・ミュージカルを中心に　更にその立役者でもあったレニー・バーンスタインについても話してみたい。

米ニューヨーク（以下NYと略称）の中心部、南北に細長い薩摩芋みたいな形状のマンハッタン島の地図を真上から見下ろすと　北側ほぼ中央を長方形のセントラル・パークが占めており　それ以外の区域は　ほとんど碁盤の目状に縦横に道路が走っているのが判る。その間を縫うように　恰も川のように蛇行しながら　ほぼ中心部を北から南に走るやや幅広の道が有名なブローウェイである。NYのほぼ中央部　即ちブローウェイのほぼ中央部を東西に細かく交差する１０数本の脇道があって、この脇道の両側に　まるで淺草６区街のように軒を連ねるように並んでいるのが　お目当のブロードウエイ劇場群である。こうした脇道両側に並ぶ40を超えるミュージカル専用劇場とともに　更にそれらの周囲には座席数300～500クラスの所謂オフ・ブロードウェイと呼ばれる小劇場が多数散在しているのだ。

筆者にとって最もNYらしい音楽劇といえば　やはりブロードウェイ・ミュージカルだったし、中でも真先に脳裏に浮んでくるのは「オン・ザ・タウン」（映画邦題「踊る大紐育」）の最初のシーン、NY港に降り立った3人の若い水兵達による"ニューヨーク！ニューヨーク！と叫びながら喜びと期待に胸膨らませて歌い出す3重唱の場面であろうか。1944年、アデルフィー劇場で初演。500回近いロングランを続けたバーンスタイン作曲による最初の傑作ミュージカルの一コマであるが、この晴々とした高揚感こそが恐らくはレニーをして以降NYを活動の拠点にしようと決めた瞬間だったのではなかろうか。

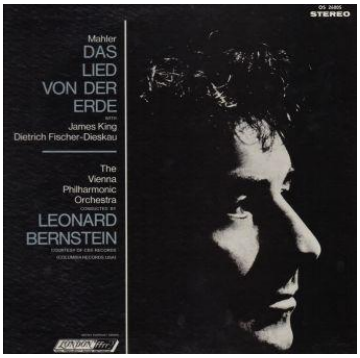
この作品以降　彼の作曲になるヒット・ミュージカルの数は多いが、同じNYを舞台にしたものだけでも「ワンダフル・タウン」（1953),「ウエストサイド物語」(1957)などが著名。多才な彼はミュージカル以外にも、幾つかのシリアスなオペラ、交響曲や管弦楽曲、「ファンシー・フリー」,「ディバック」などのバレエ曲、ミサ曲など多くの宗教曲、更にエリア・カザン監督、マーロン・ブランド主演の名画「波止場」(1954)の映画音楽などを作曲した。作曲と指揮　何れも素晴らしいが、もう一つ、彼が得意とするのはピアノの演奏であろうか。難曲として知られるラヴェルのピアノ協奏曲などの米国初演もしているが、やはり見事なのはアドリブを存分に効かせたジャズ・ピアノのソロ演奏であろう。何れも絶品といってよいが、例えば　ガーシュインの「ラプソディ・イン・ブルー」。彼が録音したこの曲を改めて聴いてみると　マンハッタンの豪華な夜景をバックに銀髪にくわえ煙草、超スローテンポで弾き始める　何とも粋なレニーの



イメージが今でも彷彿として浮かんでくる・・。

しかし　彼の本業は？と問われれば、ほとんどの音楽通は、恐らく第2次大戦後　スター性や話題性、指揮技術そのものの点からも戦後世界の指揮界が生んだ東西を代表する2大巨匠、西のカラヤンと並び称された東のバーンスタイン　と答えるのが極く一般的ではなかろうか。

さよう　1943年11月、レニーが漸くNYPの副指揮者に任命された頃、その夜　NYPを振る予定だった名指揮者ブルーノ・ワルターが急病で倒れたため、早朝レニーのアパートに突然電話が鳴って代役の要請があり、彼は全くリハーサルなしの文字通りのブッツケ本番でカーネギーホールの指揮台に駆け付け、現代曲を含む難曲ばかりを完璧に演奏し終えたのだった！



それは　まさに翌日のNYタイムズ紙朝刊が第1面トップで報じたほどのレニーのNYPへの衝撃的デビューだった。やがて当然のごとく首席指揮者を経て音楽監督へと上り詰めたが、米メイジャー系オケへの音楽監督登用は米国生まれ指揮者としては初めての快挙でもあった。

偶々筆者のNY赴任時は　まさにNYPのシェフとして彼の絶頂期だったが、いかにもアメリカ人らしくフランクで何時も底抜けに明るい彼のキャラクターは忽ち聴衆の心を鷲掴みにし　レニーの愛称で誰からも愛された。然し諸々の理由で69年退任。活動の拠点を止むなくウィーンなど欧州に移してしまう。当然の事ながら、最も悲しんだのは他ならぬ多くのニューヨーカーであり　NYPの聴衆だった。レニーファンを自認する筆者も例外ではなかったし、レニーの居ない寂しいNYの音楽シーンなど存在しないも同然だった。

このようにレニーといえば、生れ育ちもNYと思いがちだが、実は1918年8月、生れは米マサチューセッツ州のボストン近郊で、ラテン・スクールからハーヴァード大に学び、さらに作曲、指揮、ピアノ修学のため、フィラデルフィアのカーティス音楽院へ。卒業後の40年代前半に漸くNYに居を移し、処女作品「クラリネット・ソナタ」などを作曲、傍らNYP副指揮者として採用されたのである。

NYP退任後、演奏、録音ともに拠点は欧州が中心となるが、1990年夏、体調不良のため帰米し、10月　肺がんのため第2の故郷NYの自宅で逝去。享年72歳。ライバルと言われたカラヤンが亡くなった翌年であった。葬儀後、12年前に先立った妻フェリシアとともにNYブルックリンの墓地に埋葬されたが、死後真っ先に半旗が掲げられたのもNYであり、追悼演奏会を初め　レニーの功績を讃えてNYでは諸々の追悼番組が連日相次いだ。

早いもので2年前の8月にレニーの没後30周年を迎えたと思ったら　今年2020年10月には、彼の生誕100周年を迎えることになる。これを機に再びNYを中心に　彼の残した多くの作品の再演・再評価と共に綺羅星のごとき幾多の録音・録画の総括が行われ、さらには音楽教育・普及活動、平和への貢献等　生前の隠れた業績が顧みられれば　改めてレニーこそ20世紀アメリカが生んだ最高の音楽家と讃えられるのではなかろうか。話は変わるが　５月末、米ミネソタ州ミネアポリスで発生した白人警官による黒人の扼殺が原因で　現在米国各地では　広い範囲でデモや騒動が頻発している。生前から根っからの平和主義者として知られていたレニーが若し生存していたらどんなにか悲んだことだろうか。そして行動派のレニーは次に一体どんなアクションを起こしたのだろうか。想像するだに辛いことである！

米国の若者が出た序でに最後にもう一言。実はこの60-70年代といえば　NYに限らず、全米、全世界の若者たちの間で反人種差別、反ベトナム戦争などのウネリがピークに達し　モダン・フォークの分野では　ピート・シーガー、ジョーン・バエズ、ボブ・ディラン、PP&Mらが、ロックでは　ビートルズ、ストーンズなど多数、US

バンドでも　ドアーズ、シカゴなど　プロテスト系による激しいカウンター・カルチャー運動を無視することはできまい。（NY郊外で開催された”ウッドストック”　フェスティヴァルは69年8月だった）併しこうした動向については当時　特に若者間では　ほとんどが周知の事実であり、またカヴァーする範囲や地域もNYにとどまらず、かなり広くなりそうなので　誠に残念だが本稿では割愛させていただくこととした。どうか　ご了承賜りたく。

PS　この機に上記レニーに関する自著をご紹介させて頂きます。彼は日本人指揮者　小沢征爾、大植英次　両氏を含む多くの指揮者を育てたことでも知られるが、最後の愛弟子、佐渡裕氏と筆者との共著「バーンスタイン名盤100選」（新潮社　2008)が　”トンボの本”の一冊として出版されています。フルカラーで全ジャケットを掲載し、作品や演奏を要説した格好の案内書になっているはずです。更に筆者自身　熱烈なレニー・ファンの一人として想いの丈を込めた内容になっているはずですので、若し　ご興味があれば、アマゾンなどでご検索の上、ご参考にしていて頂ければ大変に幸甚です。

6.8　2020